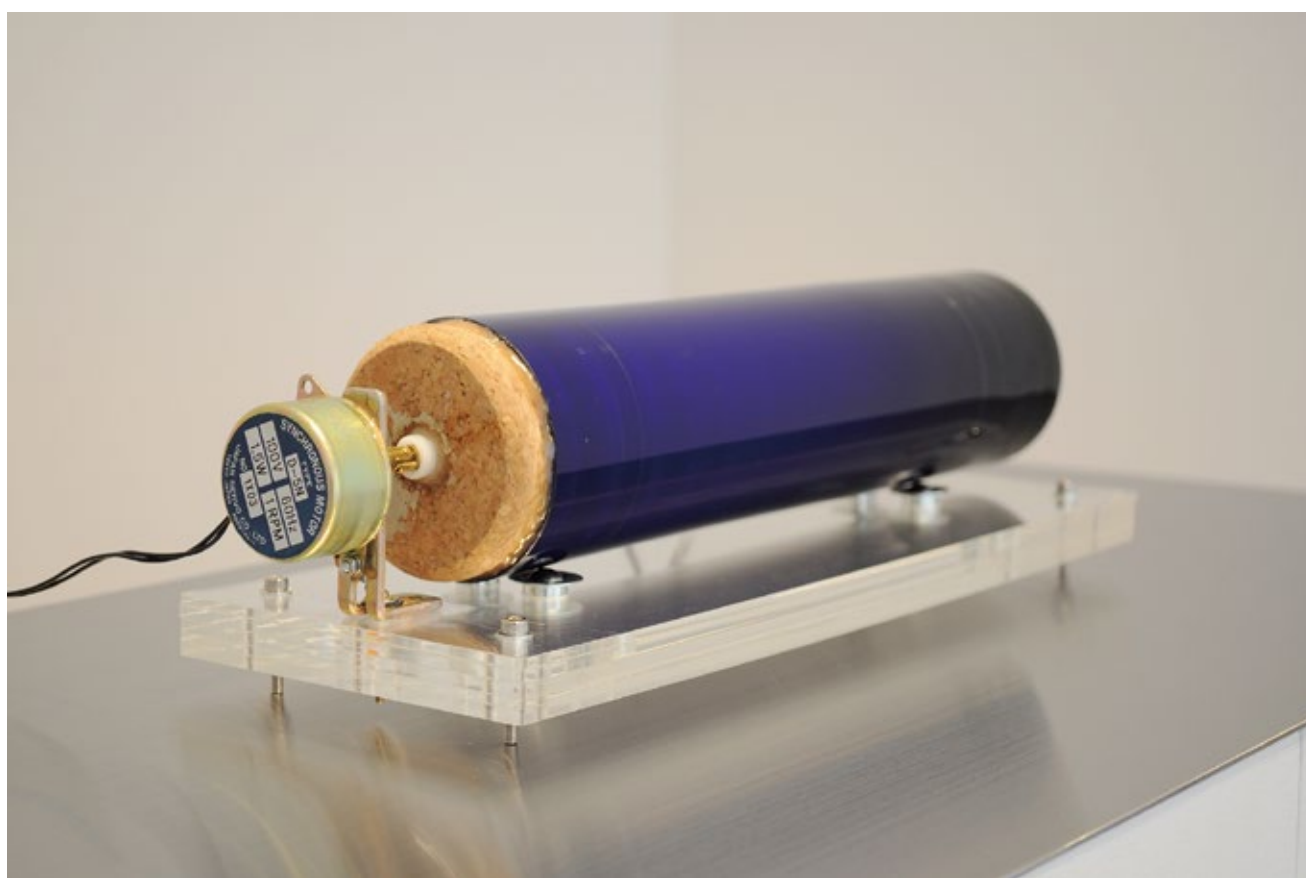


Yukio Fujimoto

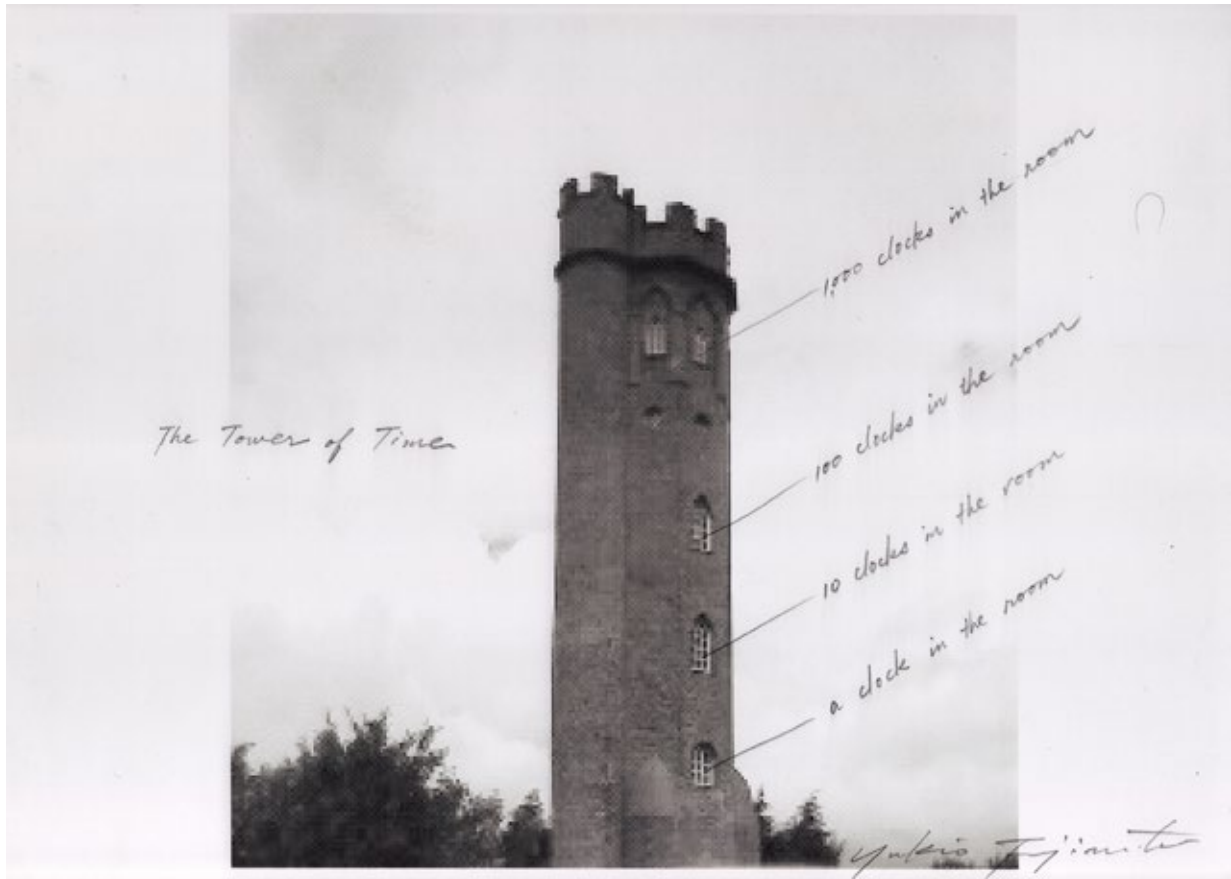
About Time



藤本由紀夫「SUGAR III」1999年

November 12- December 4, 2022

G A L L E R Y C A P T I O N



— 展覧会概要 —

- 展覧会名: 藤本由紀夫—時間について | Yukio Fujimoto “About Time”
- 会期: 2022年11月12日(土) - 12月4日(日)
- 開廊時間: 12:00-18:30
- 休廊日: 月火曜日および祝日
- 会場: GALLERY CAPTION (ギャラリーキャプション)
〒500-8813 岐阜市明德町10 杉山ビル1F tel 058-265-2336
- 1-Day Room: 11月26日(土) 13:00-18:00 * 予約不要
- お問い合わせ: 担当/ 山口 (月火曜日、祝日をのぞく 12:00-18:30)
tel 058-265-2336 fax 058-265-5715 caption@mbe.nifty.com
<https://www.gallerycaption.info/>

時間について

About Time

時間は発明であり、そうでなければ何物でもない。

アンリ・ベルクソン

70年代初頭の電子音楽スタジオでは、磁気テープによるオープンリールのテープレコーダーが主流であった。

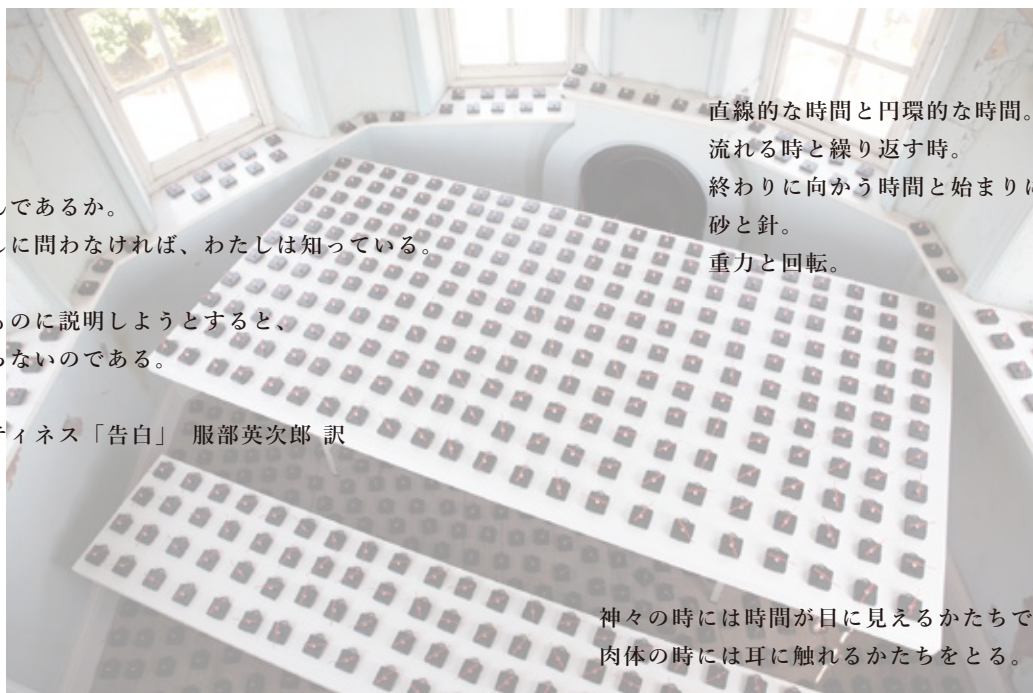
1秒間に38cmまたは19cmの速度で録音されたテープを編集するためには、欲しい音の場所に印を付け、ハサミで切り、テープで接着するという、文字通りカット＆ペーストの作業であった。そこでは「時間」が正に「長さ」として私の眼前に立ち現れていた。

「時間」という非常に抽象的な存在も、時間を表現したオブジェを通して考えると、いろいろな言葉が浮かんでくる。

流れる、遅れる、進める、止まる、戻す、伸びる、速める・・・時間を表現する言葉はほとんどすべて時間のオブジェを通しての表現である。

発明である時間に向き合うことにより、まだ何か発見できることはありそうである。

藤本由紀夫



時間とはなんであるか。

だれもわたしに問わなければ、わたしは知っている。

しかし、

だれか問うものに説明しようとするど、

わたしは知らないのである。

聖アウグスティネス「告白」 服部英次郎 訳

直線的な時間と円環的な時間。

流れる時と繰り返す時。

終わりに向かう時間と始まりに戻る時間。

砂と針。

重力と回転。

神々の時には時間が目に見えるかたちで存在し、
肉体の時には耳に触れるかたちをとる。

ジャック・アタリ「時間の歴史」 蔵持不三也 訳

各位

謹啓 清秋の候 皆様におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。
平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

さてギャラリーキャプションでは、11月12日から12月4日まで「藤本由紀夫展－時間について」を開催いたします。
本展は名古屋市出身の美術家 藤本由紀夫によるもので、当廊では9年ぶり8回目の個展となります。

藤本由紀夫(ふじもとゆきお/1950年生)は、大阪芸術大学音楽科を卒業後、70年代よりエレクトロニクスを利用したパフォーマンスやインスタレーションを展開し、1986年頃からは、オルゴールと身のまわりの日常品とを組み合わせ「サウンド・オブジェ」と呼ばれる、音をかたちで表現した作品を発表し注目を集めました。また国際的にも「ヴェニス・ビエンナーレ」に2度('01、'07)の参加を遂げるなど、国内外の主要な展覧会に数多く参加し、名実ともに日本を代表するアーティストとして評価されています。

藤本は「音」や「光」などの「目に見えないもの」を様々な手法を用い顕在化させることで「見ること」、「聞くこと」とは何かを問いかけてきました。そして、視覚や聴覚をはじめとする知覚の在りようそのものに目を向けながら、それら五感を通じて、私たちが日ごろ眺めている世界を、あらためて問い直すことを試みています。

「時間は発明であり、そうでなければ何物でもない」(アンリ・ベルクソン)

展覧会に寄せたステイトメントで藤本が引用した、フランスの哲学者アンリ・ベルクソンのこの言葉に、不思議な感覚を覚えた人も多いのではないのでしょうか。私たちは、時間とは時計のようなく時間のオブジェに表されたものことだと、いつの間にか思い込んでしまっているのかもしれませんが。本展では藤本が用意したく時間のオブジェ5点によるインスタレーションを通じて「時間について」皆さんとともに、考えてみたいと思います。「直線的な時間と円環的な時間。流れる時と繰り返す時。終わりに向かう時間と始まりに戻る時間。砂と針。重力と回転。」作家が示したいいくつかの印象的な言葉もまた、その手掛かりとなることでしょう。

会期中、11月26日には「1 -Day Room」として、1日限りの展示を、藤本由紀夫がご案内します。
是非ご高覧賜り、また皆様にご紹介いただければ幸いです。

お忙しいこととは存じますが、宜しく願い申し上げます

敬具

藤本由紀夫 | FUJIMOTO Yukio

1950年 名古屋市生まれ
1975年 大阪芸術大学音楽学科卒業

〈主な個展〉

- 1986 箱庭の音楽 (ノースフォート/大阪) <以降、'87, '88>
1989 藤本由紀夫 サウンド・オブジェ展 (児玉画廊/大阪) <以降、'90, '94>
1994 藤本由紀夫 版画展 (サイギャラリー/大阪) <以降、'96, '98, '01, '10, '18, '22>
1997 美術館の遠足1/10 (西宮市立大谷記念美術館/兵庫) <2/10-10/10, 以降2006年まで>
2000 藤本由紀夫展 audio/visual (ギャラリーキャプション/岐阜)
2001 藤本由紀夫 四次元の読書 (CCGA現代グラフィックアートセンター/福島)
アートプロジェクト 和歌の浦の丘 (和歌山市高津子山/和歌山)
2002 藤本由紀夫展 in/out (京都芸術センター/京都)
2003 藤本由紀夫展 audio/visual II (ギャラリーキャプション/岐阜)
2004 工芸館・藤本由紀夫・大原美術館 (大原美術館/岡山)
哲学的玩具 II (シュウゴアーツ/東京) <以降 '07, '09, '11, '14, '16, '17, '20>
2005 藤本由紀夫展 audio/visual III (ギャラリーキャプション/岐阜)
2006 藤本由紀夫展 ここ、そして、そこ (名古屋市美術館)
藤本由紀夫展 audio/visual IV (ギャラリーキャプション/岐阜)
2007 ECHO-潜在的音響 (広島市現代美術館/広島)
PHILOSOPHICAL TOYS (西宮市大谷記念美術館/兵庫)
+/- (国立国際美術館/大阪)
2008 LIVING ROOM (同志社女子大学mscギャラリー/京都)
2009 藤本由紀夫展 audio/visual V (ギャラリーキャプション/岐阜)
藤本由紀夫展 (アイコン・ギャラリー/パーミンガム、イギリス)
2011 藤本由紀夫展 philosophical toys (ギャラリーキャプション/岐阜)
2013 無可有郷-ユートピア: うつくしいかたち (四国民家博物館 四国村/香川)
藤本由紀夫展 REVOLUTION & GRAVITY (ギャラリーキャプション/岐阜)
2015 THE BOX OF MEMORY (京都アートホテル クマグスク/京都)
2017 キュレトリアル・スタディズ12: 泉/Fountain 1917-2017 Case 2: He CHOSE it. (京都国立近代美術館)
2019 「星の読書・夏」 (芦屋市立博物館/兵庫)

〈近年の主なグループ展〉

- 2001 第49回ヴェニス・ビエンナーレ 日本館 (ベネチア/イタリア)
Among Others AO,4 (ドルトムント美術館/ドイツ)
Facts of Life: Contemporary Japanese Art (ヘイワード・ギャラリー/ロンドン)
2002 Toshikatsu Endo and Yukio Fujimoto (ニューリン・アート・ギャラリー/ペンザンス)
本と美術 (徳島県立近代美術館/徳島)
2004 Facts of Life: Contemporary Japanese Art (ヘイワード・ギャラリー/ロンドン)
2005 風景遊歩 (丸亀市猪熊弦一郎美術館/香川)
2007 第52回ヴェネツィア・ビエンナーレ (アルセナーレ/ヴェネツィア、イタリア)
2008 aim '08「土から生える」(小山富士夫邸/土岐市、岐阜)
小杉武久+藤本由紀夫展 音楽 (国際芸術センター青森)
2011 耳をすまして-美術と音楽の交差点 (茨城県立近代美術館)
phono/ graph 音・文字・グラフィック(dddギャラリー/大阪)
2012 phono/ graph (Dortmund U/ドルトムント、ドイツ)
2013 荒野ノヒカリ (愛岐トンネル跡/愛知、岐阜)
2014 phono/ praph sound, letters, graphics (ギンザ・グラフィック・ギャラリー/東京)
2016 オープン・スペース2016 メディア・コンシャス「NTTインターコミュニケーションセンター/東京」
2017 20thDOMANI 明日展 PLUS×日比谷図書文化館 (日比谷図書文化館/東京)
ニュー・ブランシュ KYOTO 見立てと想像カー千利休とマルセルデュシャンへのオマージュ(元淳風小学校/京都)
2018 起点としての80年代 (金沢21世紀美術館/石川)
2019 六甲ミーツ・アート 芸術散歩2019(六甲高山植物園/兵庫)